

岡山県高等学校教育研究協議会
第5回会議 参考資料

- 1 第1回会議及び第4回会議での主な御意見
- 2 産業イノベーション人材育成等に資する高等学校等教育改革促進事業における改革先導拠点として採択された学校
- 3 「市町村長の御意見を伺う会」意見まとめ
- 4 「学校視察」アンケート回答（抽出）

第1回会議「魅力ある高等学校づくりの方策」における高教研委員の主な御意見

【観点1：社会情勢の変化や多様化する生徒のニーズに対応した教育内容】

- ・「学校を社会に開く」という視点を踏まえた教育課程の構築
- ・総合的な探究の時間や選択科目を充実させ、職業教育、ICTを活用した教育などを横断的に組み合わせることのできる柔軟な教育課程の構築
- ・PBLや「夢育」を通じて、生徒の興味や将来の進路に沿って主体的に学べる仕組みの構築
- ・基礎基本の学びと分野ごとの先端的・専門的な学びの両立によるスペシャリストの育成
- ・学力向上に加え、他者との関係性の構築や、部活動・地域貢献活動の充実
- ・特別支援教育体制の充実を図り、一人一人の状況に応じた学びの在り方の検討
- ・病気・不登校生徒等の学習保障のための、多様な学習形態（遠隔授業、フレックス制等）の標準化

【観点2：地域と連携した学校づくり】

- ・学びの社会還元と地域の活性化に資する企業での実習やインターンシップの実施
- ・大学等の研究機関との共同プロジェクトを通じた地域人材の育成
- ・生徒自身の興味関心に応じて、企業・大学など多様な主体とつながる学習の充実
- ・自治体と連携しながら学校づくりと地域づくりを一体的に進める取組の充実
- ・市町村教育委員会の施策も踏まえた、校種を超えた連携（小学校・中学校・高校・大学）
- ・PBLなどを通じて、中学校での学びを高校につなぎ、生徒の可能性をさらに広げる教育の実践

第4回会議「高等学校教育の基盤整備の方策」における高教研委員の主な御意見

【観点1：更なる少子化やAIの進化・デジタル化などによる社会情勢の変化への対応】

- ・都市部の公立普通科高校の定員を減らすことで、公私比率における私立の割合を30%から40%へ増やし、最終的には公私比率の撤廃が望ましい。
- ・現行の適正規模や学級編制を見直し、各地域に様々な規模の高校が配置されることが望ましい。
- ・高校は重要な社会インフラであり、生活圏域に即した高校配置を維持することが必要であるため、県北地域では、これ以上の高校の削減は望ましくない。
- ・今後も再編整備は必要である。学校数を絞り、施設設備への投資を集中することで良い高校ができればと考える。
- ・県立高校のトイレや体育館のエアコンなど、施設設備の改善が必要である。
- ・社会情勢が大きく変わる中、AIに代替されない力を身に付け、地域や社会の課題解決ができる人材の育成が必要である。
- ・高校教育の在り方については、首長部局、企業、大学など多様な関係者と一体的に議論することが望ましい。

【観点2：生徒の多様化や学習ニーズの多様化への対応】

- ・生徒が多様化している中、通信制高校の在り方などを含め、一人ひとりの生徒に寄り添える教育体制を整えることが必要である。
- ・オンライン授業については、他県事例を参照しつつ、研究を進めることが大切である。
- ・職業系高校からの進学者が、高校時代に学んだ能力を他の分野でも生かしている事例が見られることから、学科構成比率は現状維持が望ましい。

【県立東岡山工業高校】

岡山県立東岡山工業高等学校
(全日制/工業学科)

多様	
埋数	
アド	○

○岡山県の産業人材育成においては、DX化やGX化に伴う変化に対応した、実践的能力を有するイノベーション人材育成が課題

【岡山県における現状・課題】

【岡山県における現状・課題】
○2040年には生産年齢人口が約15%減少し、専門職や現場人材が決定的に不足
○AIやIoT等の先端技術を「現場」で使いこなすための実践的なデジタル環境の整備と
生徒の興味・関心に応じて専門領域を横断して学ぶカリキュラム構築が必要
○ロボティクス等の次世代産業に関する人材を輩出できるよう、高度な実習設備の整備や
企業と連携して実践的で一貫した育成プログラムの実施が必要

【拠点における主な改革目標】※【】はR7現況値とR13目標値

【拠点における主な改革目標】※【 】はR7現況値とR13目標値
・新設「養育ホール」を利用する他校の高校生（年間利用者数）：【0名→200名】
・岡山大学工学部等、最先端工学分野への進学者数：【13名→25名】
・企業・大学との高度連携プロジェクト数：【2件→20件】
・取組内容・創出するハイットケース

- ・一括募集をはじめとする学科横断STEAM型学習による多角的な視点を備えた技術者育成
- ・筑波大・山海教授と連携したサイバニカルAIの社会実装探究
- ・半導体設計等の高度な開発環境を駆使した最先端テクノロジの実践
- ・大学レベルの研究成果を武器に岡山大学等、最先端工学分野へ羽ばたく革新的進路実現
- ・異校種の高校生や企業も参画し、様々なアイデアを出し合いながら、新たなビジネスプランを創造するアントレナレーター教育の実践

(施設・設備の整備)

・「夢育木ー儿」で企業課題を解決、最先端技術を社会実装する**産学共創の拠点**を構築

・VR・デジタルツイン活用の「KYTルーム」によるデータ主導の高度安全教育を実践

【他校への普及方策】

- ・「夢育ホール」での産学共同研究や機材を他校へ開放、県の共有財産として運用

- ・学科横断カリキュラムをパッケージ化、県内工業教育をアップグレードする推進力

【その他】

連携機関の企業や学生等による放課後の学習支援・探究支援等の実施

実施体制

岡山県立岡山操山高等学校、興陽高等学校、岡山東商業高等学校、真庭高等学校、岡山工業高等学校(工業教育協会加盟校他15校)

筑波大学、岡山大学、岡山理科大学、環太平洋大学、(株)岡山村田製作所、瀬戸内サニ－(株)、(株)中国銀行等



【県立岡山操山高校】

多様	
理数	○
アド	

岡山県立岡山操山高等学校
(全日制・通信制/普通科)

【岡山県】理系的素養・文理横断型高度探究人材育成の拠点形成

○岡山県の産業人材育成においては、DX化やGX化に伴う変化に対応した、実践的能力を有するイノベーション人材育成が課題

○普通科高校においては、**文系理系問わず、理系的素養を身に付け、文理横断的に課題解決に取り組み資質・能力の育成が急務**

○文理横断的で探究的なカリキュラム開発により、**理系的素養や科学的視野を備えた、高度探究人材の育成を目指すモデルを構築**

人材育成の現状・課題

【岡山県における現状・課題】

○2040年には生産年齢人口が約15%減少し、専門職や現場人材が決定的に不足

○本県の理系選択率は43%と比較的高いが、文系選択者の中には、理系的素養を身に付けることなく大学に進学する生徒も多い

○将来的に不足する人材の確保につなげるため、**理系的素養を身に付け、文理の枠を超えて高度な探究ができる人材の育成が必要**

具体的事業内容

【拠点における主な改革目標】※【 】はR7現況値とR13目標値

- ・大学理系学部・学際系学部への進学率【37.5%→50%】
- ・探究活動の成果を活用した大学進学率【29.5%→50%】
- ・生徒の科学技術に対する肯定感・効力感【現況値なし→80%】

【取組内容・創出するパイロットケース】

(教育改革の内容)

- ・学校設定科目「**SOZAN STEAM**」を中心に、**サイバニクフィジカルAI**等、最先端の科学技術に触れ、理系的素養を涵養する、**文理横断的で探究的なカリキュラム**の開発
- ・出前講座や、大学のラボで指導を受けるアカデミック・インターンシップ等、**学びを深化させたい生徒の主体的活動**を展開する「**放課後サイエンス・コミュニティ**」の実施
- ・協力校等とともに、理系女子のロールモデルに触れる機会の創出や、理系志望の女子生徒の交流促進を行うなど、県内の**女性理系研究者育成ネットワーク**の構築

(施設・設備の整備)

大学の教員から探究活動の指導を受けたり、企業と連携した取組を行うなどに活用する新ホール「**SOZAN STEAM SQUARE (仮)**」の整備等

【他校への普及方策】

カリキュラム開発の成果や作成した教材等について研修会等で発表、共有を実施

【その他】

連携機関の研究者や学生等による、放課後の学習支援、探究支援の実施

実施体制

協力校	岡山県立岡山一宮高等学校、倉敷天城高等学校、玉島高等学校、津山高等学校、岡山城東高等学校、東岡山工業高等学校
主な連携機関等	岡山大学、筑波大学、おかやま・スタートアップ支援拠点運営委員会、BeLive実行委員会等

【人口推計】2040年の生産年齢人口:2025年と比較して約15%減少

20〜24歳を中心とした若い世代の転出超過が顕著

【就業構造】2040年:事務職56万人の余剰が生じる一方、専門職1.8万人、現場人材4.2万人の不足を予測。

【学科構成】公立全日制高校の総募集定員に対する定員の比率

普通系学科55%、職業系学科40%、総合学科5%

1. 先進的カリキュラム (SOZAN STEAM)
SSI (1年次): 理系の土台作りとDS・AI基礎
SSI (2年次): 最先端技術の体験と高度化への移行

2. 探究を深める学びの環境
SOZAN STEAM SQUARE (仮)
柔軟なカリキュラムと柔軟な探究
高度な理系的素養を身に付け、文理横断的に社会課題に立ち向かうことができる人材の育成

3. 多様な進路ネットワーク
県内の大学・企業との連携と共同研究
県外は性別関係なく育成のバリエーション

4. DXと英語の未来
主眼は「学びの場」としての活用
国際的なコミュニケーション能力の育成と強化
AI・英語の活用による国際的なコミュニケーション能力の育成と強化

5. 連携・協力の推進
大学・企業との連携と共同研究
県外は性別関係なく育成のバリエーション

【人口推計】2040年の生産年齢人口：2025年と比較して約15%減少
20～24歳を中心とした若い世代の転出超過が顕著

【就業構造】2040年：事務職56万人の余剰が生じる一方、専門職1.8万人、現場人材4.2万人の不足を予測。

【学科構成】公立全日制高校の総募集定員に対する定員の比率
普通系学科55%、職業系学科40%、総合学科5%



「市町村長の御意見を伺う会」意見まとめ

項 目	意 見
全日制・定時制・通信制の在り方	・ 高校は、義務教育のプラスアルファの側面があり、ナンバーワンや優秀な人材という視点だけにこだわるべきではない。 ・ 定時制高校は、学校になじみにくい生徒が行くという役割を担っており、地域のニーズもあると捉えている。 ・ 各校の特色化に向け、経営的な伴走支援を行うとともに、しっかりとした分析のもとでマーケットと競合優位性を見極め、オンリーワンやナンバーワンの高校をつくる必要がある。 ・ スポーツや文化活動といった強みがあれば、通学距離はあったとしても、目的意識を持って生徒が集まる。 ・ インクルーシブの関係で、岡山御津高校は入学者数が回復した。この高校がないと駄目だという生徒もあり、そうした対応ができる魅力ある学校をつくることをどう考えるのが重要である。 ・ 中学校で思うように活動できなくても、高校でリセットして頑張ろうとすれば、きめ細かい指導により再生できるような環境の学校も各地域に公立学校としてあってもよい。 ・ 最先端の技術習得や地域の伝統的な産業のカリキュラム化、地元企業と連携したプロジェクト型学習などを取り入れた、その高校でしか得られない学びが重要である。 ・ 定時制高校の在籍者数は近年増加に転じており、様々な興味やニーズを持つ高校生に対応できる環境づくりに力を入れている。県においても同様をお願いしたい。 ・ 多様化する生徒のニーズや多様性に対応するため、フレックス制や通信制の導入、不登校等の生徒の居場所づくりを行うインクルーシブ教育に関心を持っている。 ・ 各校の機能分化とネットワーク化を進め、各校が立地する地域の特性や持ち味を生かして内容を尖らせていくことが大事である。 ・ 高校の特色化を限られた地域資源の中だけでやっても限界があり、特色にならない。協議会には、踏み込んだ提言をしてほしい。 ・ オンライン学習などをさらに積極的に取り入れ大胆な変革をしていかないと、中山間地域の教育環境は維持できない。 ・ 地域で活躍した生徒が将来的に地元へ戻ってくるような仕組みや機能を持たせる必要がある。 ・ 高校も義務教育化が進む中、障害や特性のある生徒への対策が課題であり、個々の特性に応じた適切な支援員の配置が必要である。 ・ 通信制の導入や全国募集の実施も柔軟に検討すべきである。 ・ 全国から人が集まるような突き抜けた特色ある教育を検討すべきである。 ・ 20～30 年先の日本が世界で果たすべき役割を見据え、その役割を担え

	る人材の育成が必要であり、社会課題の解決のために学んでいるという原点に立ち返らなければならない。 ・教育の基本に立ち返り、大局的な教育の在り方を再考すべきで、県が独自の特色を打ち出すためには、産官学が連携して世界における日本の役割を議論し、世界で活躍する人材を育てる土壌として、それぞれの地域が持つ価値や場所の重要性を再認識した上で、新たな指針を構築することが求められる。 ・多様な分野で特色ある魅力的な高校づくりを進め、そこで育った人材が将来的に地元へ戻る流れを作るためにも、子どものニーズに寄り添う必要がある。 ・魅力的な部活や高校がないから地域外へ行くというような考え方にならない高校の在り方を議論すべきである。 ・県立岡山御津高校のフレックス制や、美作高校のブルームコースのような多様な生徒を受け入れる仕組みは、多くの生徒や保護者から求められており、県北地域においてもこうした多様な価値観に対応できる柔軟なコースや仕組みを検討・設置する必要がある。
公立・私立高校の教育分担	・県立高校も私立高校もバランスが取れており、うまく補完関係ができている。 ・県立だけでなく私立と市立もセットで俯瞰し、高校生を見守っていける環境が不可欠である。 ・私立では何が学べ、どういう環境が良いのかという理由の分析と、それが県立高校でできない理由の検証を行う必要がある。 ・この3年間で中学校から私立高校への進学比率が高まり、生徒が市外へ流出している。 ・人気が高い私立高校の良いところを参考にし、地域を盛り上げる素晴らしい高校をつくることが重要である。 ・私立と公立は共存共栄し、職業科の比率が高い岡山県の特徴を反映させ、各地域の特色を生かした学校づくりを進めることが必要である。
学校や学科等の適正配置	・生徒が行きたい学校を選択できるよう、県下において、普通科や専門学科がある程度バランスを取って通えるところに設置されているという観点を踏まえ、議論を進める必要がある。 ・県内のどこに住んでいても、一定のエリア内で普通科を含めた選択肢が確保される、学びのセーフティネットを構築する必要がある。 ・専門高校の生徒割合を現在と同水準に維持するという文部科学省の具体的な目標も踏まえ、地元の産業界で活躍する人材を育成していくことが求められる。 ・未来の子どもたちも含めて、自らの意思で進路を決定できる多様な選択の機会が今後とも十分に確保されるような体制整備を望んでいる。 ・普通科ならではのアカデミックな専門性の入り口となる学びを充実させるとともに、普通科をどれだけ地域の産業に結びつけるかが重要である。

	・小・中学校のカリキュラムと連携したPBLの展開や、専門学科と産業分野とのさらなる連携が求められる。 ・1つの高校では成し得ないことを、複数の高校がコンソーシアム的に担うネットワークを構築し、県北全体の魅力向上へと繋げることが大切である。 ・看護学科については、県北地域全体の医療体制の弱さをどう解決していくかという大局的な視点が必要である。 ・公設民営の検討を提案したい。県立が私立と組むことでおもしろい構造が検討できるのではないか。 ・公立高校の存在意義は、生徒が地域に根差して等しく教育を受けられる環境や多様な居場所を確保することにあると思うので、配慮が必要である。
学校の適正な規模、学級編制	・中山間地域における1学年1学級の容認や、1学級当たりの人数の柔軟化を認めていくべきである。 ・人口減少が進む中、小規模校の魅力も生かし、子どもたちが相互に刺激し合い、教え合う環境の整備が大切である。 ・教育現場で成果を出すためには、一定の教員数が必要であるため、他県のように余裕を持った人員配置を行い、意欲的な取組を後押ししてほしい。 ・規模の基準を柔軟にする必要があり、中山間地域における適正規模として、1学級30人または35人×2学級といった規模を容認する方向で議論を進めてほしい。 ・専門的な技術の伝達は、40人よりも20人学級の方が高い教育効果を期待できるため、学ぶ内容や学科に応じて柔軟に定義し直す必要がある。 ・地域内における適切な学校配置を維持した上で、学級数や生徒数についても中山間地域の実情に応じた配慮が必要である。 ・単に人口の多い場所に相応の規模の学校を置くという考え方には落とし穴がある。学校は社会課題の解決を学ぶ場であり、場所や箱の大きさではない。 ・学級数や生徒数を一律に求める現行の基準では、地域から高校が消滅していくため、高校が生徒と共に地域に貢献し、地域住民と相互に高め合う関係性を重視し、何が適正かを考える必要がある。
地域の状況を踏まえた教育体制整備	・教育が地域にとっていかに必要か協議会委員も認識いただき、効率性も必要だが、それだけでいいのかと伝えたい。 ・高校の存続により地域の存立基盤を維持し、人口減少を押しとどめている自治体もあるはずであり、県内の高校に関する動きを整理し、人口に与えた影響などを精査してはどうか。 ・高校は地域にとって非常に重要であり、他都道府県でも同様の議論や施策が講じられているため、兵庫県の南北問題への対応や最新の国勢調査のデータを検証し、県の施策によってどんな変化がもたらされて

	いるかをチェックする必要がある。 ・市では、独自に通学費や資格取得受験料の補助を行うほか、探究活動など教育充実の支援を継続していくため、県教育委員会におかれても、御配慮いただきたい。 ・高校のある市町の中だけで再編整備を考えると、高校のない市町村に住む生徒にとっては、行き場所がなくなるという実情をしっかりと認知し、実情に合った方針を打ち出してほしい。 ・地元自治体では、学校存続のため最大限の努力をしており、1市町1校の方針を継続してほしい。 ・小規模校を人数だけで統廃合の対象にせず、いかに魅力ある学校にしていくかを議論してほしい。 ・現行の再編整備基準が継続となり、中山間地域の学校が閉校になることは避けてほしい。 ・1市町1校に限定せず、歴史的な経緯や地区的なことも考慮した柔軟な対応が必要である。 ・既存の学校に「他校を入れてあげる」という感覚を持つと、子どもたちが残念な気分になるため、高校再編の際には「新たな学校ができる」という前向きな方針を打ち出してほしい。 ・自治体内に私立を含め高校が複数あることは自治体の大きな力であり、今後も自治体内に高校があることを強く願っている。 ・県立高校の存在感は大きく、学校がなくなることは人づくりや生活インフラに多大な影響を及ぼすと捉えている。 ・工業高校があることは、地元産業にとって重要な役割を果たしていることから、広域的な視点に立ち、しっかりと残してもらいたい。 ・普通科と専門科の高校を再編することは、双方の特色や専門性を低下させる懸念があるため避けるべきである。 ・高校は地域活性化の格であり、生徒数のみならず、地理的要件や特徴ある教育内容、産業構造への影響など地域の実情を十分に踏まえた検討をお願いしたい。 ・再編整備を否定はしないが、高校がなくなる場合の懸念として、駅までのバスや自転車通学の安全・安心といった問題、地元の小中学校や文化・スポーツ面における高校生のボランティア活動の低下が考えられる。 ・高校再編そのものは必要であるが、地元で愛されてきた伝統を重んじる声や、地元企業への就職を目指す生徒たちの熱い思いにも十分に配慮する必要がある。これまでの歴史を何らかの形でしっかり残した上で、新たな魅力を備えた特色ある学校づくりを進めてほしい。 ・地域から高校がなくなれば、子どもたちの進路が断たれ、ひいては地域の過疎化に直結するため、中山間地域の学校は残してほしい。 ・寮を含めひどい実態を十分知った上で提言をしてほしい。 ・全国募集の実施校には相応の条件整備を行うべきである。
--	---

	・域外への進学をしようとした際、受け皿となる寮が不足している。 ・学校施設の維持管理に年間 230 億円必要とあるが、これからの人材を育成するのに、それだけの費用がかかるから高校を減らす、ということにはならないのではないか。
入学者選抜 制度・通学区 域	・市内の高校へ市外からも岡山学区、倉敷学区の両方から J R を使って十分通える環境にあるため、学区の見直しや、学区外からの受入比率を高め、市外から通えるようにする必要がある。 ・生徒の主体的な進路選択を保障し、健康や生活満足度に影響を与える通学時間、生活圏に関する考えを生徒自らが意思決定できるよう、全県学区への拡大を視野に入れて、学区制の変更を検討してほしい。 ・学区を撤廃した他県では、都市部への生徒集中と過疎地の定員割れが進み、実際に学校の統廃合が加速度的に進行した事例があるのか調べる必要がある。 ・学区制を緩和又は撤廃してほしいが、急激な変更は地域のバランスが崩れるため、経過措置をとってバランスを見ながら進めることが必要である。 ・子どもの選択肢の自由は理解しているが、高校は地域創生の拠点であり、地域の存立基盤であるため、学区拡大は容認できない。 ・複数校志願の拡大はあまりよくない。学校の序列化があからさまになることは、高校や卒業生、地域住民にとっても望ましくない。 ・特別入学者選抜と一般入学者選抜の日程の一本化に賛成である。入試後の 3 月末までのゆとりを使って入試後の地域活動に取り組んでほしい。 ・社会情勢や生徒のニーズの変化に対応するため、実際に子どもたちが何を望んでいるか調査し、結果を明らかにするとともに、入試制度も子どもたちの視点から最善の在り方を検討すべきである。 ・地元自治体からは、約 3 割が県外の高校へ進学している。県内では最寄りの高校以外に選択肢が乏しい実態があるため、学区を一つにすることも有効な選択肢である。

「学校視察」アンケート回答（抽出）

○全日制・定時制・通信制の在り方に関する御意見

- ・岡山御津高校、岡山操山高校（通信制）、鳥城高校で感じたこととして、セーフティネットとしての役割や存在の重要性を感じた。
- ・多様な生徒を受け入れ、可能性を広げていくための柔軟な仕組みが必要。
- ・フレックス制や定通併修などの制度も整備して、安価で質の高い通信制課程と、全日制・定時制を併せて、フレキシブルハイスクールを実現する必要がある。
- ・岡山御津高校での不登校傾向のある生徒等に少人数できめ細かに対応する取組は、社会インフラとして必須のものと感じた。
- ・「学び直し」に前向きな生徒が多く見られることから、他県のように「学び直し」を特色とする高校を拡充してはどうか。
- ・多様な生徒がいる前提に立ち、生徒の個別性に対応できる施策を、内容的にも量的にも検討していくことが必要とされる。
- ・県立高校の通信制について、1校だけでの限界を感じた。岡山操山とは異なる授業、教育方針のタイプがあってもよい。
- ・県として、県立の通信制高校をどうするかを早急に決める必要がある。

具体的には、

- ①県の通信教育の改革先導拠点として、全県の通信の多様なニーズを満たせるほどに操山の通信を抜本的・徹底的にバージョンアップする。
- ②新たに通信・遠隔の県の拠点をつくる。
- ③操山は進学・探究系に特化した新たな通信制課程（難関大学への進学意欲や深い研究・探究意欲の高い生徒を対象とした通信制）に改めるとともに、外国ルーツの生徒や困難を抱えた生徒、不登校等の多様なニーズを抱えた生徒へのセーフティネットや社会的自立を目指す手厚いサポート付の通信制を鳥城高校ないし別途どこかに設ける。

などが考えられる。